

広島教区シノドス「宣教ひろば」の報告書

1 - 経緯

教皇庁シノドス事務局、また、日本シノドス特別チームからの呼びかけに応じて、広島教区では、2024年4月29日の午後、「宣教ひろば」という名称で、第1回目の集いを実施した。すべての小教区（41）から、司祭全員と信徒1名ずつの参加をお願いし、スタッフを含めて、全体として105名の参加者があった。各小教区から1名の信徒の参加は少ないことは否めないが、その準備段階で、小教区ごとにも「宣教ひろば」という名称で、自由参加の分かち合いの機会を実施していただき、簡潔な報告書（A4一枚）の提出をお願いしていた。また、事前準備として、4月20日には、日本シノドス特別チームの小西神父を講師として、「霊における会話」のファシリテーターの養成を行なった。当日にファシリテーターの役割を担うことになる10名（信徒、修道者、司祭を含む）が参加して、「霊における話」の意味や手法を学び、実際に「霊における会話」の体験をし、4月29日に開催される教区の「宣教ひろば」の準備をした。

2 - 「宣教ひろば」の内容

①世界シノドスの講演

全体として約4時間のプログラムの中で、世界シノドスに実際に参加した弘田しずえシスター（ベリス・メルセス会）から、最初に、世界シノドスについて、パワーポイントによる映像を用いて、全体的な説明をしていただいた。この講演によって参加者は世界シノドスがどのようなものであったかを味わい、世界の教会で、新しい聖霊の息吹が起こっていることを感じた。

②「霊における会話」の学び

続いて、日本シノドス特別チームの小西広志神父から、世界シノドスで用いられた「霊における会話」の手法について簡単な説明を聞き、そのための心構えを学んだ。

③「霊における会話」の実践

その後、約10名（信徒、修道者、司祭を含む）から成る10のグループに分かれて、ファシリテーターの進行のもとに、与えられたテーマについて、「霊における会話」を体験した。テーマは「広島教区あるいはあなたの小教区が、教会の本来の使命を果たすために、どのようにすればシノドス的教会（ともに歩む教会、あたたかさのある教会）になっていくことができると思いますか」というものであった。一部の人々には、3つのステップの異なる視点からの分かち合いを適切に行えなかったという反省もあったが、日頃できない分かち合いをするよい体験になったという声の方が多かった。また、とくに結論を出さなくても、分かち合いの体験を共有することができたこと自体が、参加者の心の変化につながったという声もあった。

3 一分ち合いの中で共通していたこと

「どのようにすればシノドスの教会（ともに歩む教会、あたたかさのある教会）になっていくことができる」のかについて、分ち合いの途中で繰り返したイエスのことば「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。あなたがたがわたしにつながっており、わたしもあなたがたにつながっていれば、その人は豊かさに実を結ぶ」（ヨハネ15・5）に関連して、根本的にはわたしたちが神の愛とつくしみにつながって、そこに留まることの大切さが共有された。

そのために神の家族として、ともに集って神に賛美と感謝をささげ、神のことばとキリストの聖体の恵みを分ち合い、生活の中へ派遣されて行くという、主日のミサの中に、ともに歩む教会の原動力があるということが確認された。また、派遣された生活の場で、教会（信者）が福音に照らされて社会に奉仕すること、社会的な問題の解決と一緒に取り組むことが、ともに歩む教会をつくることになるという声が少なくなかった。そして、生活の中での体験した事柄を、ミサの後に集まって（お茶を飲みながら）自由な雰囲気です話せる場（分ち合う場）があることを望む声が多かった。教会内外で、ともに歩むための具体的な心構えや手段として、あいさつをすること、声をかけることなど、あたたかく人を迎えて、周りの人々の声に耳を傾けることの重要性が指摘されていた。同時に教会の内部で、教会に行きたいのに行けない人々（とくに高齢者や病者）、教会から離れている人々の気持ちに寄り添い、教会に戻るきっかけをつくること重要性もあげられていた。今日的な課題として、多国籍化している信者が言葉の壁を乗り越えて交わり、協力し合うことの必要性などのあたたかさをもつことの大切さが分ち合われた。

4 今後の課題

一回限りの「宣教ひろば」では、「霊における会話」の意図やその手法を十分に学ぶことはできていないが、世界シノドスの新たな動きを、教区や小教区で身近に感じ、「ともに交わり、参加し、宣教するシノドス的な（ともに歩む）教会」となるために、今後につなげて行く良いきっかけとなった。広島教区としては、今後も「宣教ひろば」という取り組みを継続して、「霊における会話」の手法による分ち合いを繰り返して行くことを検討中である。この「霊における会話」の体験を、教区、地区、小教区の中で浸透させて行くために、その意図（目的）を学び、ファシリテーターを養成して行くことが課題としてあげられる。ただし、分ち合いのテーマや「霊における会話」の手法に難しさを感じている信者に寄り添いながら、形式だけにとらわれず、その心（精神）を大切に、あたたかさをもってキリストのうちに一つになる体験にして行くことができればよい。また同時に、既存の他の分ち合いの手法が排除されないよう、特別な配慮も必要である。

2024年6月15日